

奈良高専 図書館だより

No. 18

記事

- 読書感想文コンクール
入選作品 (9編)
- アンケートとの対話
- 図書室から

1985年2月 奈良工業高等専門学校図書室 発行

福井博士の講演を聞いて

図書館委員長

小谷 稔

去る11月22日、創立20周年記念式典の「学ぶものの心」という講演は感銘深いものであった。これは「図書館だより」であるので、読書という観点から私の受けた感銘の一部を述べようと思う。

福井博士が中学高校時代に強い感動と影響を受けた人物は、ファーブルとポアンカレーだという。ファーブルからは自然から学び自然を知るという自然主義を、ポアンカレーからは科学のための科学、実利を離れて知ることのみに価値があるという主知主義を学んだという。ファーブルはその「昆虫記」を愛読し、ポアンカレーについてはその科学随筆を愛読することによってである。博士は大学入学前にこの2つに代表される読書によって博士の人間として、科学者としての骨格を作られたのではないかと思う。小学生時代には絵が好きで油絵の道具までそろえ、中学時代は歴史、文学（謙遜して国語と言われた）を好み、そして中学時代はさらに生物同好会の熱心なメンバーであったというその述懐からも博士の豊かな感受性、幅広い人間性、純粋な向学心を感じるのである。これらが土台となって、ファーブルから受けた自然主義、ポアンカレーから受けた主知主義の深い洗礼を経て、大学での数学や物理学等への傾倒につながっている。

ファーブルが中学の先生をしながらそれよりも研究費の豊かな研究職を希望して、植物染料の改良研究に取り組み、苦心の末完成したとき、ドイツでその人工合成の研究が成功してファーブルの研究は水泡に帰してしまう。失望落胆したファーブルは「自分の望みは断たれた。しかしなお今後も自然を知るために別の研究を見つけていこう、われら働かんかな。」と「昆虫記」を結んだ。このところを中学生であった福井博士は何度も読んで涙を流したという。「自然を知りたい、学びたい」というファーブルの挫折の後も尽きない情熱は、やわらかく熱い福井少年の心に深く刻み込まれたのである。

福井博士の話に引用されてもう1つ印象深かったのは、夏目漱石の「夢十夜」の中の「六夜」にある運慶のことであった。運慶が仁王を彫っているのを見て、そののみと槌で彫られるのがあまりにすばらしいので運慶は仁王を彫っているのではなく仁王が木に埋まっているのを掘り出しているように見えた

いうのである。考える働きには論理的思考力だけでは不十分で、直観力が重要だという趣旨の話の中で引かれた運慶の仁王の寓話はこの講演の中で最もすばらしいものであった。化学反応のしくみを説明するのに世界的に使われているロビンソンの電子説では、福井博士の専攻する石油の、その成分である炭化水素の説明には不都合である。強いて電子説で説明した理論もあったが、それは説明のための説明という感じで不自然である。博士はそこに着目して、より妥当な自然らしさをもった理論を求めたのが博士の新理論発見のきっかけであったという。博士が「自然らしさ」を求めたとき、少年時代に読んだ「夢十夜」の話の強烈な印象があって、妥当な理論は、運慶の仁王のような自然らしさが必要だと考えられたというのである。福井博士の研究は私などには無縁のものだと思っていたが、研究内容は理解できないが、研究の底にある、着眼の選択に現れている博士の人間性の深さに触れた感じで厳粛な感動を受けた。それにしても少年時代の読書がこんなすばらしい形で結晶したとは。

博士の講演が「学ぶ心は自然を畏敬することからスタートする。学ぶには自然に体ごと接して体で学ぶと。それが自然の本質を探る道である。」と力強く結ばれたとき、私はフェアブルが地べたに腹ばいになって小さな虫を観察したという姿をダブらせて思い出していた。



昭和59年度 読書感想文コンクール入賞者

図書委員会 図書部会
国 語 科

恒例の、夏休み課題図書の読書感想文コンクールは、今回、9回目です。国語科と図書館委員会図書部会の委員とで慎重に審査した結果、次に掲げる9名の諸君の作品を、優秀作として選出しました。ここに氏名と作品を紹介して、努力をたゝえたいと思います。

1 E	藤本大輔	(ソフトエネルギー)	3 C	福山稔章	(八甲田山死の彷徨)
1 E	松宮 哲	(白 い 宴)	4 B	辰己耕司	(窓ぎわのトットちゃん)
2 E	金井秀夫	(窓ぎわのトットちゃん)	4 E	林 宏一	(変 身)
2 E	藤野富美	(次 郎 物 語)	4 C	中村 剛	(学問の創造)
3 C	岩谷麗司	(窓ぎわのトットちゃん)			

壹

「ソフト・エネルギー」 を読んで

1 E 藤本大輔

この本では、著者はエネルギーを作る物として扱っている。普通、エネルギーというと、石油や石炭、ウランなどのように地中深くから掘り出して使う物と思っているが、一般に使われている石油のような高質のエネルギーではなく、地熱、太陽熱、水力など、どこにでもころがっているような、低質の扱いにくいエネルギーを収穫し、人間の力によって公害もなく、再生可能なエネルギーを作り出す方法を考えている。

現在使われているガソリン、灯油、都市ガス、電力などの二次エネルギーは、元は全部原油から来ている。だから原油が止まれば全部止まってどうしようもなくなる。このように外部資源に依存し過ぎることなく、二次エネルギーが相互に変換できて融通のきくエネルギー・システムが要求される。そのためにここでは、太陽熱、風力などを一次エネルギーとし、それを水素や電力などの二次エネルギーに変換するシステムが提案されている。

ソフトエネルギーの利用の例として、驚くべきことに、京都の旧家の消暑の仕掛けや、中央アジアのチルラと呼ばれる冷水の井戸などが紹介されている。昔の人々がそんな巧妙な方法を考え出したのに対して、現代のエネルギー利用といえば、馬鹿の一つ覚えみたいに、掘って見つけてそれを使い、無くなればまた掘る、という具合で、知恵を働かせて作り出すことを知らず、掘っても出てこなくなった時のことを考えようもしない。「石油無くなりゃ原発」と、廃棄物の処理や安全性もろくに考えず、金儲けのために好き勝手に原発を建てる。いくら使っても無くならず、好きなだけ栽培できるソフトエネルギーを今まで使わなかった理由は技術的な問題ではなく、産業が利潤追求に走り過ぎたためのようにも思う。これは考えてみれば大変恐ろしい事である。確かに原油から電力に

変換し、使いっぱなしのハードエネルギーは、量があるうちは経済的に有利である。しかしそれは再生することができず、減りはしても増えることはない。その不安定な台の上に乗っているのが文明社会であり、又、この状態がいつまでも続くかの様に錯覚している。台がこけた時、文明が崩壊するのを防ぐ手だては無い。常に台の上での技術の進歩と産業の発展しか考えていないからである。しかし、文明社会を動かしている原動力である産業が、利潤追求の競争をしているのではどうしようもない。だから、エネルギー問題については、国家レベルで早急に技術開発する必要があると僕は考える。

日常我々が使っている電力やガスは大抵の場合、どここの家庭にでも通じており、必要な時に必要なだけ使うことができる。しかし、これらのエネルギーがいつ止まるかもしれないという危険性は日頃さほど考えることもない。だが止まってからありがたみを感じたところで仕方がない。いつかは止まるのが分かっているのだから、それに替わるソフトエネルギーの研究を、とまではいかなくとも、原油のエネルギーの恩恵にどっぷりつかってしまうことだけは避けたい。

そもそも石油などというものは、太古の昔に動物が住むのに有害な物を吸収して酸素を吐き、動物に適した環境をつくってくれた植物の死骸からエキスをしぼり取っている様なものなのだから、それが有害でないわけがない。風呂の残り湯を飲む様なものである。実際、工場排気熱による局地的な気温上昇や煙のせいで、異常気象を招いたり、温室効果が問題になったり、光化学スモッグは出るは原油汚染は起こるはと、ろくなことがない。とはいってもどうせ石油はすでに枯渇しかかっているのだ。これからは一般市民が声を大にして危険で先の見えているハードエネルギー——原子力——に反対し、安全かつ合理的なソフトエネルギーの研究開発を要求するとともに、まず個人レベルで、節約することも真剣に考えていかなくてはならないと思う。

「白い宴」を読んで

1 E 松宮 哲

この宴には、作品に登場する人物すべてが参加していますが、とりわけ、その中心となったのは重藤教授でした。彼は、この宴の幹事だったのかもしれませんが。宴で一番酔いしれたのも、また彼のように。彼は、医学という巨塔に魅せられて入り込んでしまい、ついには巨塔の頂点に立つことを望んだのでしょう。その欲望が日本の医学者の誰よりも強かったのです。

重藤教授は、手術直前までずい分と迷います。日本最初の心臓移植手術であってみれば、無理もないことです。そして手術をするか否かについて賭をしその結果をみて、最後の決断を下します。こうしたところに、人間的な弱さの一端をのぞかせていますが、その後の行動力や対処能力・洞察力などをみると、彼はまさに超人的だと思いました。

彼は、手術を始める前から移植する方の青年を七番の手術場に入れました。彼の頭の中では、もうこの時点で始まっていたに相違ありません。溺れた青年の治療に手を尽くしていることを明示するために、見学室のついた手術場で手術を行ったのです。

手術は成功し、移植をうけた青年は三カ月程生きていました。重藤教授にとっても、満足のいくものだったと思います。しかし青年は、最後には死んでしまいます。私には、教授が患者の死んだ日を二日ほど遅らせて発表しているように思われてなりません。

いずれにせよ、青年が死んだ時点で、この宴はおひらきとなって、後に残ったのは、酔った人とグチをこぼしている人だけとなりました。

私たちは、数々の医学の進歩に、大きな恩恵を

受けています。そしてその進歩は、さまざまな人々の努力と勇気によってなされ、支えられているのだと思います。心臓移植の手術についても同じことが言えます。医学の進歩のためには当然通らなければならない道程だったのかもしれませんが。手をこまねいては、早い時点で二人の青年とも死んでしまっていたかもしれません。溺れた青年に、引き続き蘇生術を施してみても助からなかったかもしれないのです。そう考えてみると、教授が心臓移植を断行することで一人の命の救いに賭けたことは、一概に悪いとは言えないと思うのです。

多くの人々は、心臓移植にある程度の期待を持っていました。そして、その期待感は手術が成功した時には、最高潮となっていたと思います。しかし、患者が死んでしまうと結果論として、悪かった点だけがあれこれとあげつらわれるのです。そうした空気の大きな渦のみ込まれて行ったのが江口家であり佐野家であり、そして重藤教授だったのでしょ。やはり酔いしれさせたのは、国際的にも国内的にも科学技術万能を信じて飲め飲めと言った時代の流れ、そして回りの人たちだったのでしょ。

重藤教授もまた、被害者の一人だったと思います。しかし、もしかすると、彼には、患者の命より自分の名誉や栄光の方を優先させる気持ちがあったのではないでしょか。

私たちは医学の進歩に大きな恩恵をうけています。そして、その医学の進歩は、人々の名誉心や自己顕示欲の上に築かれて行くものなのかもしれません。しかし、人命のかけがえのなさ、尊さは今さら言うまでもないことです。白い巨塔の内部は密室で外部から見えにくいからこそ、医者は常に倫理的に厳しくなければならぬと思います。人の命が宴のさかかに供されるようなことは絶対にあってはならない——読み終えてそう思いました。



窓ぎわのトットちゃん

2 E 金井 秀夫

私は、黒柳徹子という人物を、テレビの音楽番組や対談などでよく拝見する。大らかで明るく、どこかまだ子供みたいな人だなという印象を持っていた。また彼女は英語が話せて、手話をするので、とても偉い人だと感じていた。そしてこの本を読んで、その理由が理解できたのである。トモエ学園の伸び伸びとした教育、先生と児童とのコミュニケーションの良さがひしひしと感じられた。

小学校を退学になるという珍しい出来事、そしてそれはトットちゃんにとってはよい出来事であった。小学校を退学になるというのだから、トットちゃんはおそらく想像を絶する子供であったに違いない。それが型にはまった教育よりも、自由で、奔放な教育が似合っていたのだろう。本来、教育というものはそうあるべきなのである。しかし現在の教育制度では、そういった望ましい教育が実施されないのである。あるマンモス小学校で、先生が担当していないクラスの子供に、「おっちゃんだれ？」なんて聞かれるなんて、トモエ学園では考えられないことである。

トモエ学園、こんな素晴らしい学校が現在、世の中にあつたら、と少し残念な気持ちがある。電車の教室なんてとても夢があるではないか。小林校長先生が、この夢いっぱいの子供達を乗せてレールのない、自由な道に連れていったのである。また、トモエの授業方法も実に素晴らしい。同じ教室内で、本を朗読している子がいるなら、アルコールランプに火をつけている子もいる、というふうに、子供一人一人の自主性が現れている。つまり、先生がすべて教えるのではなく、自習みたいに自分で考えて勉強するのである。みんながいっしょに全く同じ勉強をするのではなく、それぞれの個性が伸びるような勉強が、今の世の中で一番必要なのではなかろうか。

トモエ学園にはいろいろな子供がいた。高橋君や泰明ちゃんのような、身体に障害を持った子もトットちゃんと同級生だ。残念なことに泰明ちゃんは大人になれずに死んでしまったが、いつも小林先生が「みんな一緒だよ」と言っていたのは、たった一度の人生が不幸になってはいけぬ、子供たちにコンプレックスを持たせてはいけぬという願いがあったからである。男の子も女の子も素っ裸になってプールに入ったのも、そういった羞恥心をなくすための努力であったのである。そして高橋君が、小学生ぐらいの身長のまま、社会

に出て、第一線で働いているというのも、小林先生の努力のたまものであろう。

「子供達の生まれつき持っている素質を周りの大人達が、失わずに大きくしてやれるか。」といつも考えていた小林先生、こんな素晴らしい教育者に恵まれて育ったトモエ学園の子供たち、その伸び伸び教育から個人個人の個性が育てられ、優秀な人々がたくさん生まれたのである。今の教育者の方々も、きっと小林先生のように努力されていることであろう。

トットちゃん、とても元気で活潑な子、元氣過ぎてトイレの汲み取り口に飛び込んでしまったり、体が不自由で木に登ったことのない泰明ちゃんに木の上からの美しい景色を見せてあげようとした優しい子、おてんばなトットちゃんにいつも、「君は本当はいい子なんだよ。」といった小林先生、戦争で焼けてしまったトモエ学園、しかし、心の中でいつまでもトモエ学園は生き続けることであろう。

私はこの本を読み終え、感動にひたりながら、テレビのスイッチをひねり、「徹子の部屋」を見ている。

次郎物語を読んで

2E 藤野 富美

去年は“太郎物語”だったから今年は…という訳ではない。確か小学生の頃だった。夢中で次郎物語を読んだ覚えがある。それをふと思い出したのだ。そして私は本棚の奥からその本を引っ張り出した。赤い表紙もボロボロで少し変色してしまっている。すう、と一ページを開くと次郎は動き始めた。

次郎は生まれてすぐに里子に出された。その間乳母の浜に大変かわいがられたが、やがて家に連れ戻される。しかし彼を待っていたのは幸福ではなかった。男三人兄弟の次男坊、損な役所の上に後から彼一人割りこんだのだ。人一倍感受性が鋭くデリケートでもあった彼はうまく溶けこめないまわりの人々との微妙な異和感もある。が、彼はそう認めるのを拒んだ。彼は意地っ張りでも負けず嫌いでもあったのだ。彼は平気を装う。それは苦痛であり、彼を追い立てた。気の強い反抗的な態度を取り、いたずらや乱暴も繰り返した。大人たちは彼を“問題児”と受け止めた。

大人たちは…ここで私ははっと気付いた。読み始めてから何かがひっかかっている。そう、その原因、幼かった私には次郎の立場に立って読むのが精一杯、ゆとりなどなかった。それが今は少しずつ次郎を取り巻く環境にも目を向けていたのだ。

この物語にはさまざまな“大人”が登場する。体裁、信念、思想、愛情、絶対的な家族制度の中でそれぞれが違った面を持っている。それは小さな社会として存在して、それは次郎自身にも反映されていく。彼は味方には従順であり、敵には冷淡であった。それは無意識のうちの彼の自衛本能であったのかもしれない。

民と浜の態度は対照的である。頭の中で愛する民と心から愛する浜、民は理屈で次郎に接し浜は好意で接した。民は浜にでさえつらく傲慢に当たったりした。次郎も民よりも浜によくなついている。やがて民は肺病となり、死を前にして浜にあまりながらしみじみと打ちあける。

「子供ってただかわいがってやりさえすればいいのね。…私、この頃いつもこの子に心の中であやまっているのよ。」

母の心が通じたのか、次郎も臨終前にはよく看病した。民と浜は生みと育て、次郎の母親である。ここで初めて二人の気持ちが一致したのである。

また二人の祖母もおもしろい。本田は世間体ばかり気にして大げさなのに対し、正木は心温かく優しい。この二人のやりとりは少し喜劇的でさえある。

そして父の俊亮はいつも堂々としている。かなりワンマン的な面もあり、家も没落させてしまったりするが、次郎のより所である。彼は次郎を理解しようとし信頼も得る。そして次郎に真実というものを教える。そして正木の祖父。彼も次郎を見守る。次郎自らが自分の行動に責任と判断を持つように悟らせる。永遠というものを次郎に考えさせたのも彼であった。

現代と違うのは男性は絶対的主導者であること。最終決定は男性が下す。次郎の理解者がこの二人であったのは力強い。しかし次郎は十歳、まだ子供である。が大人たちは彼を単なる子供としなかった。自分の感覚で彼を受け止める。その厳しさの中で数々の体験を通しながら次郎は成長していく、逆境も乗り越える。そして最後の民の愛情によって彼の心は安らかに落ち着いていく。彼は負けなかった。ついに勝ったのだ。

次郎、どこにでもある平凡な響きの中に彼の真実が息づいている。これからも私の中でこの“真実、をかみしめていたい。次郎の成長とともに…



窓ぎわのトットちゃん

3C 岩谷麗司

子供は罪な生き物かもしれない。純真な心による行為が相手を傷つけてしまうことがある。純心に、奔放に生きて害を及ぼすことがある。しかし、子供は、そのことに気付くことはできない。彼らはそれに気付く暇がないほど自由に生きられる存在なのだろう。人生の長い道程の初めに人はみな純心に夢中にわずかな時を生きる。その時ひたすらに純真に、夢中に生きられたなら、彼らのその心は素敵なものになるだろう。子供は純真に、夢中に生きることが許される生き物で、大人はそれ

を許すべき生き物であるのかもしれない。

大人は子供の純真さを感じとる力、理解する力さらにそれを生かす力を持って子供にかかわるべきである。しかし、多くの場合大人はそれらの力を失ってしまっている。それらの力を本当に持つことはほとんど不可能なものかもしれない。

トットちゃんも純真な普通の子供だった。それなのに、前の学校から出されてしまった。そしてトモエ学園に来た。彼女の、悪意を持たない純真な行為が生んだ罪を消すことができる場所がこの学園であった。ここには、子供の純真さを感じとり、理解し、それを生かす力を持った人、小林先生がいたのである。トットちゃんの世界と、小林先生の世界とがきれいに解けあったのである。

子供は自分の世界の中で生きている。しかし、

大人には子供の世界がほとんど見えず、大人の世界の、その一部で生きているもののように見えるらしい。事実そうなのかもしれないが、子供はそれに気付くことはできない。なぜなら子供は、生きていく「ものさし」をほとんど自分の内に持っているのだから。トットちゃんの「ものさし」もまた、そうであった。

「どうしてそんなふうに行くの。」

トットちゃんは泰明ちゃんにそう聞く。彼は、「僕、小児麻痺なんだ。」

と言う。そしてトットちゃんと泰明ちゃんとの友達づきあいが始まる。この二人の姿はとてもきれいだ。彼へのいたわりがあって同情がないのだ。トモエ学園には、他にも障害を持つ子供達がいるのに、みんなとても明るくさわやかだ。トットちゃんほど障害者に対して素直に素敵に接することができるだろうか。そして、障害を持ちながら彼らほど明るく、素敵に生きることができようか。子供達の内なる「ものさし」は小林先生の偉大な「ものさし」と共鳴しあって、どの子供も伸び伸びと個性を伸ばし、いたわりあっている。

現代の日本の社会でトモエ学園のような教育を行うことは難しい。それは空しい理想に過ぎないかもしれないし、この教育が正しい理想と言えるかどうかは現在の私にはわからない。人間に接することは非常に難しいことであり、まして人間の成長に方向性を与える「教育」などというものに「かくあるべし」という正答などないのかもしれない。そして小林先生が追求し、実践した教育もすばらしいけれども、ほんの一つの道にすぎないのかもしれない。小林先生がトモエ学園を再建できなかったのは、単に経済的理由からだけなのだろうか。

私はトモエ学園の子供達や先生達の生き生きとした姿をこの本で読みながら、私自身の小学校生活を常に一方で思い出していた。私達の先生も熱心であり、私達子供も明るく活発であった。けれどもトモエ学園のそれとは異なるものである。それは私の場合だけでなく現在の日本のほとんどの小学校に共通することであろう。トモエ学園には小林先生の、子供一人一人を伸ばす「ものさし」があり、子供達の内なる「ものさし」を輝かせていた。それに対して現在の教育では、大人の「ものさし」で子供達の「ものさし」が作られている。

親も子供も自分独自の「ものさし」をさびつかせているのだ。そしてトモエ学園は再建できない状況なのである。

トットちゃんは小林先生と出会う前から、もともと彼女自身がすばらしかった。ただ自分の内なる「ものさし」でどのように外の世界と接すればいいのかわからなかっただけなのだ。大人はあくまで子供をそばから支えることしかできず、生きていくのは、やはり子供自身である。してみると子供の個性と能力を見つけながら、子供の独り立ちをうまく支えてやるのが大人の役割だと思ふのである。小林先生のように。

八甲田山死の彷徨

3C 福山 稔章

白い地獄、冬の八甲田山は白魔の棲む山であった。気温零下二十二度、風速三十メートル。まさに雪地獄である。この地獄へ雪中行軍隊は踏み込んだのだ。明治三十五年一月二十三日、神田大尉の率いる青森第五連隊の二百十名と、徳島大尉が率いる弘前第三十一連隊二十七名が同時に、同一コースを逆の方向から行軍して来て、山中ですれ違うという計画であった。

徳島隊は、わずか二十七名であったのにもかかわらず、一人の犠牲者も出さずに成功している。一方、神田隊は二百十名もの兵士がいたのに生還したのはわずか十一名であった。神田大尉も徳島大尉も、どちらも優秀な将校であった。それなのに、この結果はいったいどういうことなのか。その明暗を分けた原因はリーダーの指揮のあり方にあると一応は考えられる。つまり徳島大尉は指揮権をすべて自分に任せられるという前提で指揮官を引き受けたが、神田大尉の場合は、同行していた上官山田少佐が重要な判断に際して常に神田大尉の指揮権を奪ったということである。神田大尉は正当な指揮官として自分の意志を断固推し進めるべきであった。それに反して、徳島大尉は自分の信ずるところを貫くことにおいて、はるかに果敢な指揮官であった。

しかし、私は両者の違いをさらにこう考える。成功した徳島大尉は優秀な指揮官である以上に大自然の底知れない力を深く認識した人間であったということである。彼は岩木山での体験もあって八甲田山の寒気の激しさ恐ろしさを知っていた。

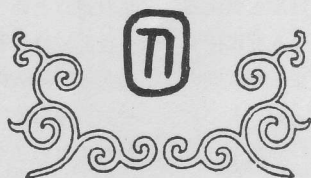
そして雪中行軍では「地元民の履く雪沓が一番いい」というような雪への対応の知恵もっていた。山田少佐と神田大尉は単なる軍人であって自然の力を結局は軽視していたのである。

寒さとは何か。雪とは何か。その真実の姿を知るべく行軍隊は魔の八甲田山に突入した。来る日も来る日も、胸まで埋まる雪の中を歩き冷たい風がさらされていると、その圧倒的に壮大で凶暴な自然の中で、人の心は裸になり、感情の起伏は激しくなって、物と人、人と人との空間が消えさり、闇となりついには絶望に至る。寒気、疲労、絶望感から狂気の状態となり、自ら軍服を脱いで凍死する兵隊もいたというのである。我々の想像をはるかに絶した世界が、そこにはあったのだ。

人間と大自然との関係はいかにあるべきか。冬の八甲田山などという、およそ人間の行くべからざるところに出かけていくことが間違っているということ以上に、人間の生存などということとは無関係に存在している地球の恐ろしさ、そこに勝手に住みついてしまった人間というものの、あつかましさとということまで考えさせられる。人間は自然を破壊しつつあるが、絶対に自然を征服してしまうことなど出来ないのだ。時には、自然が思い

がけない大きな、どんでん返しをかけてくるのだ。私は死者百九十九名という惨事を忘れて、大自然とはこういうものだったのだな、という一種の恍惚感に打たれた。青森第五連隊の悲劇は大自然を精神力で征服できると思いがった精神主義の悲劇である。大自然を見くびってはいけない、ということが作者から我々へのメッセージではないだろうか。

人間は行動する前に考える。しかし、自然はそうではない。自然がもし考えるとしたら同時にそれは現実に行動しているということである。だから自然の動きは、人間にとって不意打ちをかけるように思える。最近では、王滝村の地震のように自然は常に人間に対して不意打ちをかける。ネズミは船が沈む前に逃げ出し、蛇や蛙は地震の前に地上へ姿を現わし、鳥は一斉に羽ばたいて樹木から空へ離れると聞いたことがある。だが、人間は動物から人間になり、文明を進める過程で、本来もっていた自然状況の予知能力を喪失してしまったのだろうか。いや、自然予知能力だけでなく、なにかもっと大事なもの、大自然との調和、大自然への畏敬を喪失してしまったのではないだろうか。



「窓ぎわのトットちゃん」 を読んで

4B 辰 巳 耕 司

現在では、小学生のうちから受験受験と親が騒ぎたて、学校が終わると子供たちはすぐ学習塾へと向かう。家に帰ってくると塾の宿題に追われ、テレビを見る暇もない。あるテレビ記者が、1人の母親に「なぜ、そんなに勉強させるのか。」と聞くと、その母親は「一流大学に入るためには、有名高校に入らねばならない。その有名高校に入るには、今のうちから勉強して有名中学に入らないと手遅れだ。」などと答えていた。しかし当事者である子供たちは、その生活に決して満足していないはずだ。ただ友達も同じような生活をしている

ので、あまり不満を感じないだけなのだろう。彼らは、現代社会が生んだ受験戦争の被害者である。また、彼らの親が子供たちにしていることは、昔で言う「しつけ」ではなく、「おしつけ」ではないのか。

こうした「おしつけ」教育とは対照的に、子供たちが本当に楽しんで勉強できる学校——そう、それがボヘミアン的でかつユニークな教育方法を行ったトモエ学園である。まず子供たちの興味をひく電車の教室がある。それに、栄養のバランスを考えて、「山のもの」と「海のもの」を弁当の中に入れて来させ、みんなで見せあいをして、食べる前に歌を歌ったりする。また授業が朝のうちに終わればピクニックへ出かけたり、特別のリズム教育のリトミックをとり入れたりするなど、楽しく学ぶための試みが数多くなされている。

それらすべてを自分で考案されたのが、校長の小林宗作先生である。この方は、本当に子供たちの身になって考え、子供達の話に耳を傾けておられる。小林先生こそ真の教育者であると思う。先生は、運動会するとき、背が低く手や足も短い高橋君が、絶対勝てるような競技を考えたり、日頃「君は絶対できるからね。」と高橋君に語りかける。またトットちゃんにも、「君は本当はいい子なんだよ。」と、いつもそう語りかけて、子供たちに暗示をかけるようなピグマリオン効果を用いて、彼らに自信がつくように導いておられる。

それに、一番素晴らしいのは授業の方法である。普通の学校は、1時間目が国語なら国語をやり、2時間目が算数なら算数を、というように時間割の通りにやるが、トモエ学園の場合は、1時間目が始まるときに、その日1日の時間割の全部の科目の問題を先生が黒板に書いて、個人個人が好きな科目から始める。だから子供たちは、国語であろうと算数であろうと、何をやってもかまわない。作文の好きな子が作文を書いていると、後ろでは、理科の好きな子がアルコール・ランプに火をつけてフラスコをブクブクやったり、なにかを爆発させているなどといった具合である。こうした授業のやり方は、上級になるにしたがって、その子供の興味の対象や、興味の持ち方、物の考え方、そして個性といったものがはっきり出てくるから、先生にとっても子供達を知る上で、何よりも勉強になるだろう。

トモエ学園の教育に照らして現代の小学校教育を考えてみると、今の教育に不足しているものは、先生の厳しさや優しさではない。本当に子供たちの身になって考え、彼らの才能を見つけてやることだということがわかる。能力主義と選別一辺倒の教育ではなく、子供の個性を尊重し、その能力をのびさせてやる教育へと、その方向を転換しなければいけないと思う。

今、目の前に小学生のトットちゃんがいたら、私もまた小林先生と同じように、「きみは、ほんとうは、いい子なんだよ！」と言ってあげたい。それほどトットちゃんは生き生きとしていて、かわいらしい。読み終えた後、たまたまテレビのスイッチを入れると、「玉ネギおばさん」こと著者の黒柳さんが「ザ・ベストテン」の司会をしていた。その个性的で、魅力あふれる活躍ぶりを見てみると、トモエ学園の光景が彷彿としてきて、小林先生の教育の力の大きさを改めて強く感じたこ

とであった。

「変身」を読んで

4 E 林 宏 一

この九十ページにも満たない短編「変身」には一人の平凡なサラリーマン、グレゴールが巨大な毒虫に変身してしまってから干からびて死んでいくまでの異常な物語が淡々と描かれていた。だから、想像もつかないような出来事であるが、読んでみると、もしかしたら本当にこのような事が起こるかもしれないと思うこともあって、思わず物語の中に引き込まれていった。

ある朝、目が覚めたグレゴールは、自分が毒虫に変身しているのを知って、最初、悪夢に違いないと思った。無理もないことである。確かに彼は心だけは人間であった。しかし、彼の外形は紛れもなく毒虫に変わっていたのだ。

毒虫に変わってしまったグレゴールの姿を見て彼の両親や妹は嫌悪の念を抱く。もしも私たちの家族に、これと同じような悲劇が起こったとして「それでも変わらぬ愛情を抱きつづける」と、いったい誰が断言できようか。私たちの周りでも、血族間の殺人事件や家庭内暴力が数多く発生している。そして、その原因は、家庭外のトラブルの持ち込みや、家族間のコミュニケーションの不足だといわれるが、根本的には家族同士・人間同士の不信感からくるものである。だから、親しいはずの家族間でも、普段から意志の疎通を密にして、互いの信頼関係をしっかりとうちたてておかなければならないと思う。毒虫の姿に変わったグレゴールに対する家族の場合でも、もしも彼らの間に信頼関係があったなら、家族のために懸命に働いて養ってくれたグレゴールに対して、いくら醜悪な姿に変わったからとはいっても、彼の死を願うなどということは絶対できなかったはずだ。血を分けた家族ならなおさらのこと、今まで通りまでとはいかなくても、何とかやっていくことができたはずだ。そうでなければ、毒虫となった後までも、家族の事ばかり考えつつ死んでいったグレゴールの心があまりにも可哀想ではないか。

最後まで毒虫のまま死んでいった一人の人間、そうだ、人間と呼びたい。この物語の中でグレゴールは、人間の姿こそしていなかったが一番人間らしい人間であったと思う。何と哀れなんだろう。

人間の姿に戻れると思っていたのに。最後までそうなることを願っていたのに。死に際だけはせめて元の人間の姿で迎えさせてやりたかったと思う。

グレゴールの死後、残った家族三人はほっとして行楽に出かけて行く。悪夢のような出来事を早く忘れ、将来の夢をうちたてたかったのであろう。それだけに、グレゴールの悲惨さは、際立っている。だから、この物語に、現在の私たちに通ずるところがあるのは、人間の生のはかなさであり、不確かだということであると思う。現代のさまざまな矛盾や不合理を背負って生きる私たちには、核戦争や、人口増加、異常気象、食糧危機などの破局が、既に時間の問題としてさし迫っているように思われ、それに対する不安は、ぬぐいきれないものとなっている。この「変身」という言葉自体が端的に人間の生を暗示しており、「巨大な褐色の毒虫」は、孤独な人間の世間に対する不信の叫びや、その不信から生み出される恐怖を物体化して表わしているかのように思えてくる。一見確かに華やかな現代文明の中に生きる私たちの、しかし、本当は脆弱で不安定な現実の姿を見せつけられた思いがした。

「学問の創造」を読んで

4C 中村 剛

著者福井謙一博士は、私の最も尊敬する人の中の一人である。それはただ、福井先生がノーベル化学賞を受賞されたからだけでなく、先生の学問に対する姿勢、物の見方、考え方は、私には備わっていない偉大なるものであるからである。

先生は奈良市押熊町の杉沢家でお生まれになった。その押熊という町は、私の住んでいる所から1キロ程、離れたところで、現在でも杉沢という大きな家は残っている。先生は幼少時代、大阪に住まれたが、春、夏、冬の休みの間は、押熊で過ごされた。そして二人の弟達と一緒に、東山（今の平城ニュータウンの丘陵）で、山菜や茸採り、魚釣り、昆虫採集などで一日中、遊んでおられた。そして、そのように自然と触れ合ったことにより、科学的直観が養われたと述懐しておられる。その東山は私の家の裏山で、私が小学一、二年の頃でも、まだ開発は進んでおらず、かなり深い山であった。私もその頃、よく昆虫採集に行ったものだ。私が幼い頃、遊んでいた場所で、先生も遊んでお

られたことを知り、先生は偉い方で、自分には近づき難いという思いは消え、自分の先輩のような親しみを感じた。

先生は独創的な仕事をするための「広く学ぶ心」「基礎学問の大切さ」を強調されている。福井先生は、中学時代は文学、史学、高校時代は、数学と独語、そして剣道に力を注がれた。大学では応用化学を専攻されたが、専ら、量子力学を独学され、化学という経験の学問において、数学的手法によって理論的に化学反応を決定するという独創的な論文によって、ノーベル賞を受賞された。このように先生は決して一つの学科に固執されたのではなく、実に広く学ばれた。しかし、現代のように発達した学問をすべてマスターするのは、至難の技だ。だから、どうしても広く浅くという姿勢になり、共通一次世代の特徴といわれる紋切り型人間になってしまうのではないかと私は思った。先生はこの点について次のように語られた。「今の学生は、私たちの学生時代とくらべて、勉強しなければならないことの量が多すぎる。収集しなければならないことの量が多すぎる。収集しなければならないことの情報量が格段に増えている。それを思えば、こんな理想論に対して、無駄なことを勉強している暇はないといった反論が返ってきて、しかたがないかもしれない。が、それを承知の上で、私は強調したいのだ。創造をめざすには、せまい勉強はためにならない。努めて広く学ぶことが大切である」と。

先生の第二の信条は、「応用をやるには、まず基礎を学べ」である。先生は、「広く学ぶことは大切である。が、それは多数の文献を読み、多量の知識を不統一に吸収することとイコールではない。……（中略）……化学のような各論的になりやすい学問領域では、複雑に分岐していく発展の結果を克明に吸収するよりも、それからすべてに通ずる基礎に精力を集中するのは場合によっては有効である。」と、言っておられる。これは我々のような基礎理論を応用する立場にある工学部の者には心しなければならぬことばだと思った。

先生は最後に、創造の目的は、「地球の遺産の保全と人類の持続的な生き残り」であると言っておられる。化学の分野では、今まで技術者は目先の営利にとらわれ、自然作用では分解されない物質を多量に排出し、いわゆる「公害」を生み出した。このように自然に逆らうと必ず歪みが生じると思う。これからは、今、学んでいることが、創

造の大目的とどんな関係を持っているのか見抜く、鋭い先見性を養わねばならないと思った。



アンケートとの対話

カウンターに設けてある「意見箱」や、学生諸君がおいてくれた「目安帳」、そして、秋の読書週間の催しについての感想をお願いした箱の中に寄せられた「意見」を諸君も一緒に読んで下さい。次ページで述べますように、ゴモットモ、という意見からハナが咲いて実現することもあり、この様にいろいろな要望・苦情など気のついたことは積極的に「意見箱」「目安帳」、又口頭、何でも結構、沢山よせて下さい。図書室へ行ったら楽しいヨ、とか、どうしても本が読みたくなる。という特効薬は、特に歓迎します。是非教えて下さいネ。読書の好きな、図書室をよく利用する、積極的読書マンの意見は、それほど読書が好きでもなく、興味のない諸君にホンの少し、**本好き薬**になるでしょうから。

〔意見 1〕 昭和59年 2月

この前、みんなに希望購入図書のアンケートをやったのに、本の種類が前と全然変わっていないので、もっと購入して欲しい。(でないアンケートをなぜとったのかわからないので……)

〔意見 2〕 昭和59年 2月

わが校の図書室の継続雑誌中に、オートバイの雑誌がありません。この手の雑誌希望者の中には危険な乗りかたをする者や、事故をしたり、いろいろあると思います。しかし純粋なモーターサイクリストもいないわけではないのです。単車は立派なスポーツです。(中略)なぜモーターマガジン・モータービートルがあってオートバイがないのか、雑誌の選定を明らかにして、なぜオートバイ雑誌の希望が多いのに購入されないかを明らかにすべきです。建設的意見を求めるのはそのあとです。

〔意見 3〕 昭和59年 6月

機械科の人間として、単車、車等に接することは極めて有効で、機械に対しての興味がわいてくるのです。流体しかり、設計しかり、図書室にくる機会が多くなってにぎわうことは良いことだ。

ゴロヤスコラ等の雑誌についても学校としてもよいことで、これもさんせい。何がしたいのかというと、バイク関係は、モーターサイクリスト&サイクルサウンドの2冊ぐらいでよいと思う。

〔意見 4〕 昭和59年 11月

単車の雑誌は、個人的にはあっても良いと思う。1冊を取りあひするのでは? 読みたい人は自分で買おうでしょう。POPYE もそういう意味ではなくてよいと思うが、長い目で2~3年先Fashionの変化をバックナンバーを開くとき見ることができるかもしれない。GOROをおくなくて、

なかなかやりますなあ、もっとやって。

〔意見 5〕 昭和59年 11月

バイクの雑誌が多いが、これらは「検討の余地がある」というものではないのか? バイク雑誌を読んだからといって事故が増える訳ではないし、学生に最も興味のある分野がないというのはどうか?

〔意見 6〕 昭和59年 11月

モーターマガジンがあるからバイク雑誌も取ってほしい。サイクルサウンズは内容がじゅうじつしている。オートバイやモーターサイクリストは広告のページがやたらに多くぶあつく高い。FMレコパルよりはFMファンの方が内容が良い。(中略)ゴングはプロレス好きは多くないので必要はない。

Lマガジン、フォーカス、GORO、スコラ、ペントハウスについては必要ないと思う。大学ではポルノを上映するところもあるらしい、一つぐらいは学生がよろこぶと思う。ポパイは取ってほしい人が多いと思う(私も)。

〔図書室から〕

(I) 前ページの意見、その他について図書室から

- 1983年12月に雑誌について調査をしたこと、更に読書週間の催しのかたわらで、調査結果による上位15種の希望雑誌を参考用に、11月分だけ展示しました。雑誌についての意見が多かったのは、そのためと思われます。意見はそれぞれ筋が通っていて参考になります。御要望にこたえて、さらに図書委員会で再検討いたしましたが大矢張りイエスは得られませんでした。又、見方を変えて別の雑誌にも目を向けてみて下さい。
- 1984年6月の中頃は暑かったですね。そのため「クーラー入れてほしいな」「自分だけよかったらええのか」という切実で激しい声もありました。事務室も風通しの悪い夏暖房はたまりません。この声から大型扇風機2台を入れて切り抜けました。また契約電力量のワクを上げることに成功しました。椅子、書籍、雑誌等がしばしば乱雑に放り出されてあることから心配していましたが、扇風機のスイッチは大方、使用后切られていました。エネルギーについての理工系学生としての教育の成果？ いずれにしてもこの行為は評価できます。
- 奈良県の二万五千分の一、カラー地図を揃えてほしい、という希望に対して、今回「二千五百分の一・航空写真地図集成」が図書室に入りました。アナタのお住居も載っているかも？ 大切に利用して下さい。

- (II) 1984年、秋の読書週間の催しとして、8月に惜しまれて逝った「有吉佐和子」と、購入希望雑誌15点の11月分のみ、併せて展示しました。メインテーマの方より雑誌に人気が集ってガッカリでした。中には展示著作を貸して下さい、という学生もあり、資料不足でしたが、真面目に見てくれた学生も少なからずありました。例年、高専祭と図書館全国大会が重なり、折角の催しが十分に生きないのが悩みの種です。次に展示した「有吉佐和子著作」の目録を掲げます。

処女連禱	連 舞	夕陽ヶ丘三号館	有吉佐和子の中国レポート
まつしろけのけ	仮 縫	更 紗 夫 人	日本の島々、昔と今
断げん	ぶえるとりこ日記	女二人のニューギニア	開幕ベルは華かに
花の命	日 高 川	母 子 変 容	
江口の里	乱 舞	真 砂 屋 お 峰	地 唄 (墨、黒衣等)
祈 と う	華岡菁洲の妻	複 合 汚 染	
新女大学	海 暗	鬼 怒 川	
ほ む ら	出雲の阿国	青 い 壺	
有 田 川	芝 桜	和 宮 様 御 留	
助左衛門四代記	針 女	悪女について	最後の植民地 (共訳)

〔記 事〕

1984年秋、全国図書館大会・高専分科会において、明石高専・寺脇弘光氏が「高専図書館基準をどのように考えるか」、鈴鹿高専・大谷佳範氏「図書館業務における電算機利用について」の題でそれぞれ発表されました。又、第四分科会、短大・高専図書館部会では本校図書室の山口京子が「奈良県図書館協会、大学・短大・高専・専門図書館協力体制について」を、県下の現状と共に報告いたしました。創立二十周年を迎え、学校の歴史と共に図書室も大きく飛躍発展することを願っています。1985年、ウン年の今年、ジックリ腰をすえて読書の楽しみを味わって下さい。